

志賀直哉

現代日本文学アルバム

6

JAPANESE MODERN LITERATURE IN PHOTO

NAOYA
SHIGA

志賀直哉

監修委員

川端康成

井上 靖

編集委員

足立卷一

奥野健男

尾崎秀樹

北 杜夫

現代日本文学アルバム

第6巻

志賀直哉

昭和49年2月1日 初版発行



発行人 古岡秀人
編集責任者 桜田 満
発行所 株式会社 学習研究社
東京都大田区上池台4丁目40番5号
郵便番号 145 振替 東京 142930
電話 東京 (03) 720-1111(大代表)
印刷・製本 図書印刷株式会社
製函 永井紙器印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
表紙 特種製紙株式会社

* この本に関するお問合せやミスなどがありましたら、
文書は、東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)
学研 ユーザー・サービス部
現代日本文学アルバム係へ
電話は、東京 (03) 720-1111 または
東京 (03) 727-1600 へお願いします。

©1974 Printed in Japan

目次 NAOYA SHIGA

目次

志賀直哉文学へのいざない……………

新編

5

志賀直哉文学紀行／個性に貫かれた風景…藤枝 静男

69

志賀直哉文学旅行ガイド…………… 涌田 佑

101

志賀直哉の素顔……………

117

志賀直哉とその時代	平野 謙
-----------	------

志賀直哉主要作品鑑賞小辞典	三好 行雄
---------------	-------

年譜	紅野 敏郎
----	-------

著作目録	紅野 敏郎
------	-------

主要参考文献	紅野 敏郎
--------	-------

写真 (「志賀直哉の
素顔」の一部)

入江泰吉
大竹新助
斎藤勝久
土門 拳
三ツ木照夫

資料提供
阿川弘之
網野 菊
荒井和夫
梅原龍三郎
浦窪義郎
大熊勝朗
小熊勝夫
尾崎一雄
上司海雲
桜井勝美
里見 淳
志賀康子
志賀順子
志賀直吉
鈴木隆子
滝井孝作
長与茂子
平野 謙
広津桃子

藤枝静男
堀切 誠
武者小路実篤

朝日新聞社
我孫子市役所
猪谷旅館
岩波書店
尾道市役所
学習院大学
角川書店
共同通信社
国会図書館
正 倉 院
清泉女子大学
東 宝
日本近代文学館
福島県立図書館
福島民報社
文藝春秋
法 隆 寺
法 輪 寺
北海道新聞社
毎日新聞社
港区役所
読売新聞社

(五十音順敬称略)

編集スタッフ
編集責任
桜田 満
編集担当
勝呂睦男
校正
須山康邦

写真
榎本時雄
谷津富夫
成田牧雄
増山紀夫
山本成夫

地図製作
玉木図版社

装幀 大川泰央

レイアウト 大川泰央

志賀直哉文学へのいざない



鳥取・大山の山麓に寂れたたたずまいを見せる阿弥陀堂

永年、人と人との関係に疲れ切った了った謙作には此所の生活はよかった。彼はよく阿弥陀堂という三四町登った森の中にある堂へ行った。特別保護建造物だが、縁など朽ち腐れ、甚く荒れはてていた。然しそれが却って彼には親しい感じをさせた。縁へ登る石段に腰かけていると、よく前を大きな蜻蛉が十間程の所を往ったり来たりした。両方に強く翅を張って地上三尺ばかりの高さを真直ぐに飛ぶ。そして或る所で向きを変えると又真直ぐに帰って来る。翡翠の大きな眼、黒と黄の段だら染め、細くひきしまった腰から尾への強い線、——みんな美しい。殊にその如何にもしつかりした動作が謙作にはよく思われた。彼は人間の小人、——例えば水谷のような人間の動作とこれと較べ、どれだけかこの小さな蜻蛉の方が上等か知れない気がした。

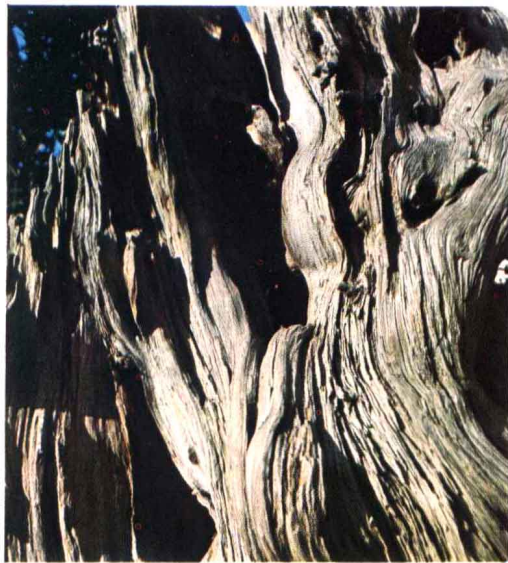
〔「暗夜行路」第四・十四より〕

暗夜行路

◀東京・深川の木場付近

「暗夜行路」は直哉の集大成的な重みをもつ唯一の長篇小説であると同時に、日本文学史上にそそり立つ名作でもある。生れながらに孤立感を負っている主人公の時任謙作は、放蕩生活の末、氣持を清算するために旅立つ。が、或日、自分が祖父と母との間に生れた不義の子であることを知り、また氣持が乱れ出す。謙作は京都で見染めた美しい直子と結婚し、平安な新婚生活を送るが、その幸福も長くは続かなかった。妻の直子は、謙作の留守

中に従兄とあやまちを犯してしまう。謙作は理性と感情との苦しい戦いから逃れるように旅に出る。そして伯耆大山の大自然の中で肉体と精神の調和に感動し、涅槃の境地に達する。全篇は美しい倫理感に貫かれており、妥協を嫌忌する主人公のけわしい道程は、虚偽を許さぬ強い自我を持つ作者自身の精神の遍歴ともいえる。また、尾道や大山などの自然描写は、作者の的確な眼で鋭く射貫かれており、その美しさは無類のものといえよう。



東京・根岸のお行の松

謙作が自分から放蕩を始めたのはそれから間もなくであつた。或る曇つた薄ら寒い日の午前の事だ。彼は現在少しもそう云う衝動なしに、寧ろ決めた事を決行するような心持で、深川のそう云う場所に一人で出かけて行つた。其二年程前に木場からその辺、それから砂村を通じて中川べりに出た事がある。それ故、道は大概分つていた。

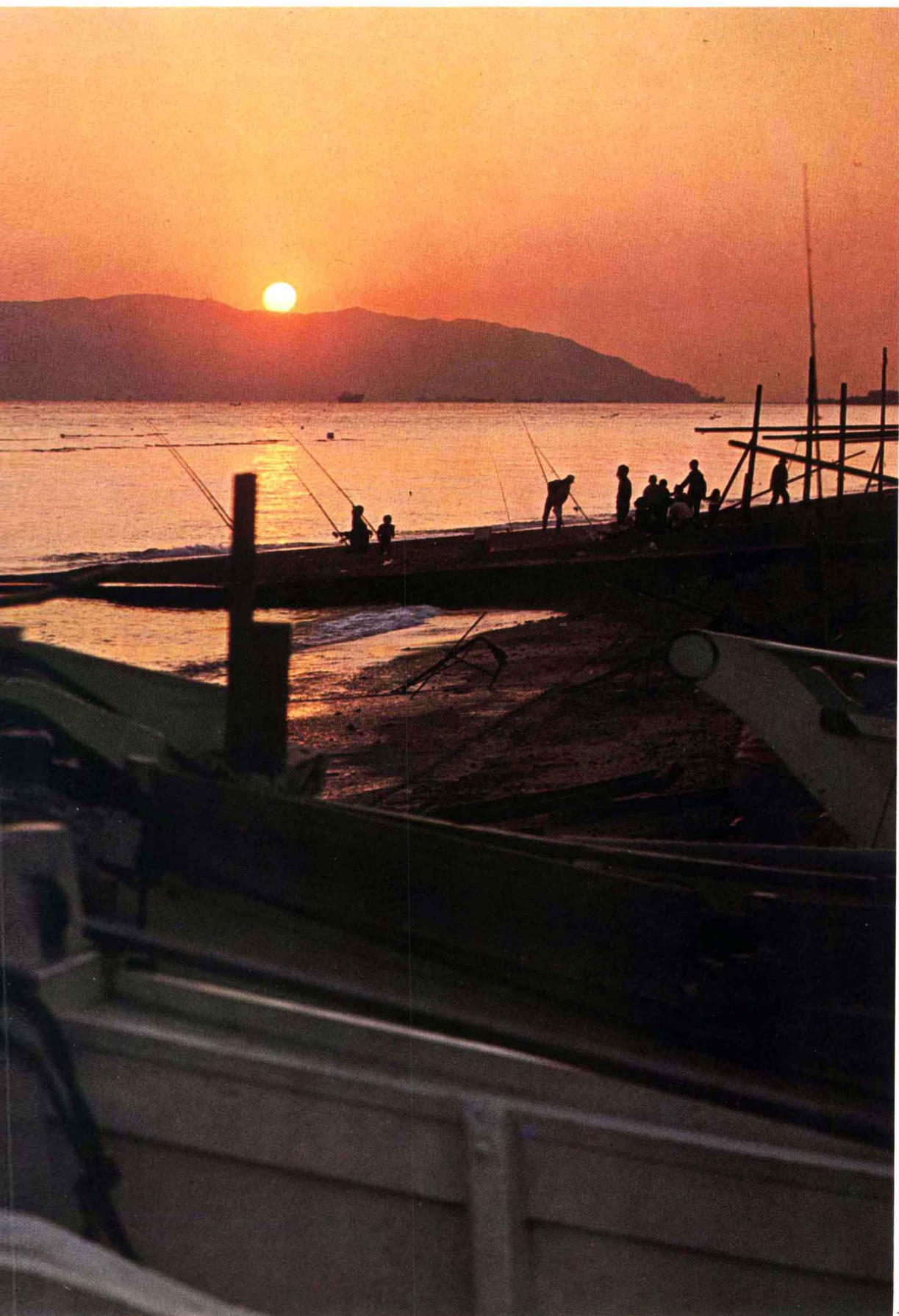
(第一・十二)

二三日すると其老人は又やつて来た。その時私は初めてそれを祖父として父から紹介された。更に十日程すると、何故か私だけがその祖父の家に引きとられる事になった。そして私は根岸のお行の松に近い或る横町の奥の小さい古家に引きとられて行つた。

(序詞)

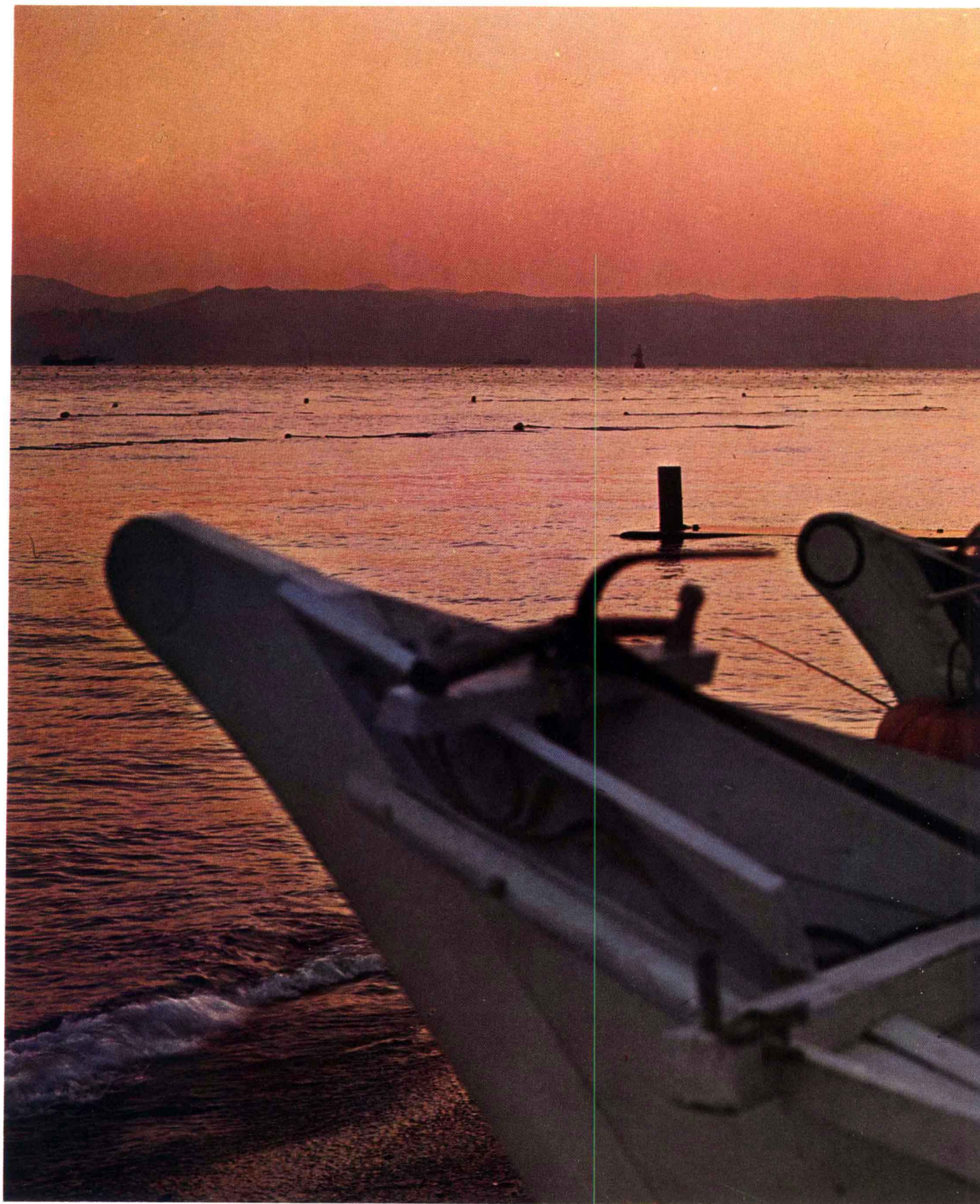
お行の松付近の家並み





塩屋、舞子の海岸は美しかった。夕映を映した夕なぎの海に、岸近く小舟で軽く揺られながら、胡坐をかいて、網をつくらっている船頭がある。白い砂浜の松の根から長く綱を延ばして、もう夜泊の支度をしている漁船がある。謙作は楽しい気持で、これらを眺めていた。

(第二・二)







尾道・千光寺の本堂より市街と尾道水道を望む

翌日十時頃、彼は千光寺と云う山の上の寺へ行くつもりで宿を出た。その寺は市の中心にあって、一ト眼に全市が見渡せるというので、其処から大体の住むべき位置を決めようと彼は思った。

(第二・二)

暫くして彼は再び、長い長い石段を根気よくこつこつと町まで降りて行った。其朝、宿の者に買わした下駄は下まで降りると、すっかり鼻緒がゆるんでしまった。不潔なじめじめした路次から往来へ出る。道幅は狭かったが、店々には割りに大きな家が多く、一体に充実して、道行く人々も生々と活動的で、玉の岩の玉を抜かれた間拔な祖先を持つ人々には見えなかった。

(第二・二)

広島 尾道・千光寺道 直哉の住んだ三軒長屋はここから近い。4年ほど前まではこの辺から見渡す家々はほとんど瓦屋根であったが、今ではビルディングが林立してしまった▶



二階の静かな部屋に通された。彼は起って、障子を開けて見た。
未だ戸が閉めてなく、内からさす電燈の明りが前の忍返しを照らし
た。その彼方が一寸した往来で直ぐ海だった。海と云っても、前に
大きな島があつて、河のように思われた。何十隻という漁船や荷船
が所々にもやっている。そしてその赤黄色い灯の美しく水に映るの
が、如何にも賑やかで、何となく東京の真夜中の町を想わせた。

(第二・二)

千光寺の山腹より眺めた
尾道の夜景 水道を
隔てて向島の造船所が
見える



